

「朱く鳴る（仮）」映画プロット

【ログライン】

15年前、りんご並木の盗難事件をきっかけにすれ違った男女。現在は伝統工芸の道で葛藤する男と、スランプに陥る女優として再会した二人は、問題児の少年とともに並木に向き合う。

「土に触れ、手を動かす」非効率な時間を通して過去の誤解を解き、再び希望を持って歩み出すヒーマンドラマ。

【作品概要】

- 長野県飯田市の名所「りんご並木」を舞台に、心に傷を抱えた男女と少年の交流を描く物語。
- 飯田を象徴する風越山や南アルプスといった美しい谷地形の風景を背景に据える。
- 単なる美談ではなく、戦後教育の歴史的文脈や、効率化が進む現代における「職人文化」の価値という本質的なテーマを組み込む。
- 悪人の出ない純粋な思いを軸とし、見終わった後に「生きている幸せ」を感じられる、希望に満ちたハッピーエンドを目指す。

【登場人物】

- **守屋 鳴海 (29)** : 飯田の伝統工芸である「飯田水引」の若手職人。過去の出来事をきっかけに人と距離を置き、AI や効率化が重視される現代において、非効率な手仕事の価値と事業承継の壁に葛藤している。
- **羽月 朱音 (29)** : 人気女優。過去の記憶を抱えたまま帰郷し、演技のスランプに悩んでいる。
- **内野 孝蔵 (59)** : 飯田東中学校の校長。かつてりんご並木の世話を担当しており、戦後教育の歴史に強い思い入れを持つ。縦割り行政による並木の表面的な扱いに危機感を抱いている。
- **酒井 集 (13)** : 家庭環境が複雑で学校でも問題を起こしている少年。罰のように並木の世話を任されているが、大人が言う「シンボル」という言葉を冷ややかに見ている。

《過去》

- 羽月 朱音 (14) / 守屋 鳴海 (14) / 内野 孝蔵 (44) / 佐竹 純平 (14)
※第4稿から、純平は「悪意」ではなく「未熟さゆえの過ち」として描く。

【あらすじ】

1. 現在：飯田の風景と再会

水引職人として働く守屋鳴海 (29) は、効率化の波の中で手仕事の意味を見失いかけている。彼の住む飯田市は、風越山に抱かれた美しい谷地形の街だ。街中では、登下校中の中学生たちが横断歩道で立ち止まり、車に一礼する「当たり前善意」が日常として根付いている。

ある日、鳴海は納品に向かう途中で、ドラマ撮影のために飯田を訪れていた羽月朱音 (29) と15年ぶりに再会する。二人は過去のすれ違いから、ぎこちない距離のまま言葉を交わす。

2. 過去：土に触れる意味

朱音は母校を訪れ、校長の内野孝蔵（59）と再会し、並木の世話を罰としてさせられている問題児の酒井集（13）と出会う。朱音の頼みで、鳴海も並木の世話を手伝うことになる。

並木の作業中、孝蔵は集と鳴海に語る。りんご並木は単なる大火からの復興のシンボルではないと。敗戦によって価値観が崩壊し、教育の拠り所を失った当時の教師たちが、「子供たちに土に触れさせる」ことで活路を見出そうとした葛藤の歴史なのだと。しかし現在、行政の縦割り構造の中で、並木は表面的なイベントの飾りのように扱われてしまっていると孝蔵は嘆く。

3. 変化：職人の手と繋がる時間

鳴海は、非効率でも黙々と木に手をかける時間が、自らの水引職人としての「手仕事」と通底していることに気づく。集もまた、鳴海の職人としての真摯な姿や、並木に込められた先人たちの思いに触れるうち、ただの罰だった作業に愛着を持ち始める。

そんな中、15年前に管理費を盗んだと疑われていた事件の真相が明らかになる。かつての同級生・佐竹が現れ、自分が持ち出したことを告白する。しかしそこには悪意ではなく、若さゆえの純粋な嫉妬と後悔があった。鳴海は「一人で抱え込もうとした俺も未熟だった」と静かに受け入れ、過去のしこりが解けていく。ミステリーの要素が回収され、誰も悪人のいない優しい真実が残る。

4. クライマックス：共に守る

秋、収穫を前に大型台風が飯田を直撃する。夜、強い風に揺れるりんご並木を心配した集は、一人で木を守ろうと飛び出す。そこへ鳴海と朱音が駆けつける。さらに、集の姿を見た他の中学生たちも次々と家から飛び出し、自発的に木を支えようと集まってくる。

「木は一人じゃ守れない。まちも同じだ」 鳴海たちは手を取り合い、強風の中でりんごの木を守り抜く。挫折を経験した主人公たちが、りんごの木のように力強く立ち上がる姿が重なる。

5. 結末：希望の広がり

台風が去り、無事に収穫されたりんご。集たちの提案で、そのりんごの一部は「平和と復興の繋がり」として、広島へと届けられることになる。飯田の小さな並木で育った実が、外の世界へと繋がっていくスケール感が描かれる。

朱音が東京へ帰る前日の夕暮れ。15年前にすれ違った木の下で二人は向き合う。

鳴海のもらった帽子を手にした朱音に、鳴海は静かに微笑む。赤く実ったりんごが風に揺れ、二人の止まっていた時間が再び動き出す。

街を照らす夕陽の中、生きていることの幸せと温かさを残し、物語は希望に満ちたハッピーエンドで幕を閉じる。（終）